

---

---

# いきいきと話をする子

## ～話をしたい気持ちと口腔機能を育てる～

多治見市立精華小学校附属愛児幼稚園 教諭 古田 博子

---

---

### 概要

自分の意見を言うことや、人の話を聞くことはコミュニケーションの基本である。幼児期において、自分の話が相手に伝わったという満足感が十分に感じられると、相手の話にも耳を傾けられるようになると言われている。

本学級の幼児は、話はできても発音が不明瞭な子、自分の気持ちを言葉で表現できない子が多く、友達に手を出してしまったり、思いを理解されず気持ちが崩れたりすることがあった。そのため、**子ども達がいきいきと話ができるようになるためにはどのような方法があるのか**を考えたい。

「話したい」「伝えたい」と思うような感動体験やじゅくじゅくと話をする場を設けると、相手に伝えたい、共感してほしいという気持ちが湧き、言葉で伝えようとする姿が見られる。そんな体験を積み重ねて、**話す意欲**につなげたい。また、十分に思いを話すことで**相手の話にも興味をもって耳を傾けられる**ようになってほしいと願う。

### 1. 主題設定の理由

本園は多治見市の中心部に位置した園である。

昨年までは各学年1クラスの小規模園であったが、今年度より2園が統合したことで園児数が増え、明るくにぎやかに生活している。

本学級は3歳児20名で、全体的に好きな遊びを十分楽しむ姿が見られるが、自分の思いをなかなか伝えられない子や、話はできても発音が不明瞭な子がクラスの半数ほどいる。うまく思いが伝えられず友達に手が出てしまったり、思いを理解されず気持ちが崩れたり、何事にも自信がなさそうな様子が見られた。そこで、園生活を通して様々な経験をし、保育者や友達と信頼関係を築くことで、安心して自分の気持ちを言葉で表現できるようになるのではないかと考えた。

普段なかなか自分を表現できない子ども達も、「話したい」「伝えたい」と思うような感動体験を通して、共感してほしい気持ちが湧き、言葉で伝えようとする姿が見られる。そのような体験を積み重ねることで話す意欲につなげたい。

自分の話が相手に伝わった満足感を十分に感じられた子は、相手の話にも耳を傾けられるように

なると聞く。のびのびと楽しそうに話をする姿、相手の話にも耳を傾ける姿勢は、新教育要領にある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の協同性や言葉による伝え合いの基礎になっていくのではないかと考える。

全身を使った遊びを十分に行い体幹を育てることで、指先や口など細部の運動機能が発達するとされる。このように、体幹を育てると共に、口腔機能を高められるような遊びを意図的に行うことで機能の向上を目指し、話したい意欲を育てるためにはどのような援助が必要なのか考えたい。

### 2. 研究仮説

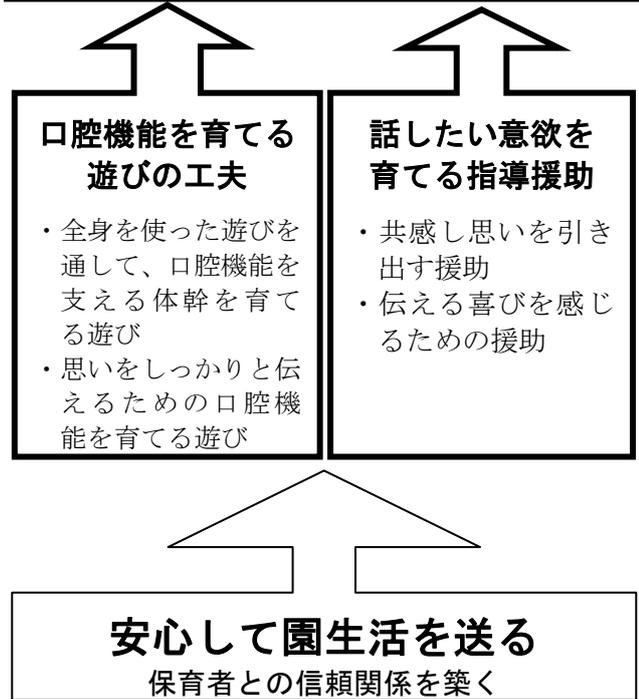
実践にあたり、以下のような仮説を立てた。いきいきと話をするためには、相手に分かりやすく伝える口腔機能を育てると共に、話したい意欲を育てることが大切である。

心情と機能の両面を育てることが、意欲的に話す姿につながるのではないかと考える。

〈期待される姿〉  
**相手の話を聞こうとする姿勢**



〈本テーマ〉  
**いきいきと話をする子**  
 聞いてもらえた満足感を味わう



【図1 研究仮説図】

### 3. 研究内容

〈研究内容 1〉

**口腔機能を育てる遊びの工夫**

・生活や遊びの中に口腔機能を育てる活動を取り入れ、楽しみながら発音の明瞭化をねらい、自信をもって話せるようにする。

- (1) まねっこ遊び (いきいき遊びの活用)
- (2) タフロープを使った遊び (身近な素材の活用)

〈研究内容 2〉

**話したい意欲を育てる指導援助**

・保育者が一緒に遊び、思いや行動に共感することで日常の活動を感動体験につなげ、話したい、聞いてほしいという思いを引き出す。

- (1) 共感し、思いを引き出す援助
- (2) 信頼関係の中で伝える喜びを感じるための援助

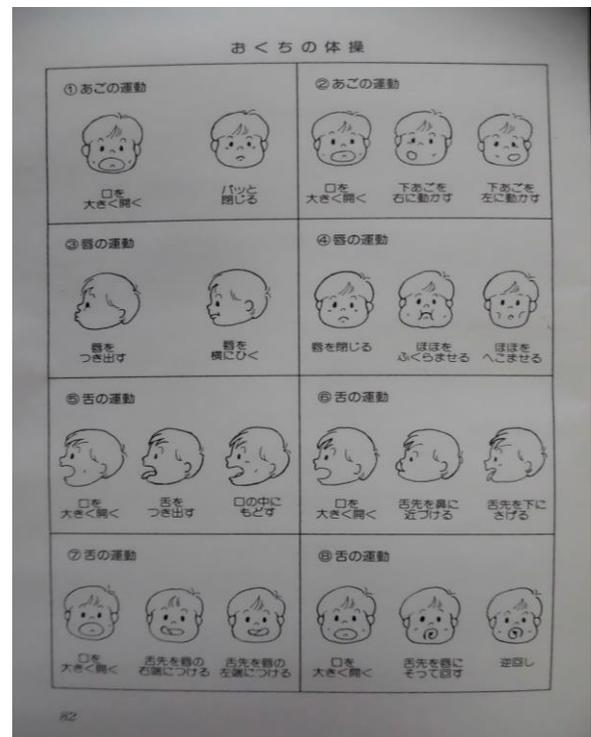
### 4. 実践

〈研究内容 1〉

**口腔機能を育てる遊びの工夫**

(1) まねっこ遊び

はっきりと自信をもって話すには口の開閉や唇、舌などのスムーズな動きは不可欠である。また、毎日繰り返すことが大切であると考え「おくちの体操」をいきいき遊びの中で「まねっこ遊び」として取り上げ、毎日取り組んだ。



【写真1 口腔機能を育てる遊びの表】

中川信子著 (2009) 『ことばをはぐくむ - 発達に遅れのある子どもたちのために』 ぶどう社より引用

まねっこ遊びをいきいき遊びの始めに位置付けることで、以下の効果が期待できると考えた。

- ・初めに行うことで、その後の遊び（言葉を言う遊び）で口がよく動く。
- ・毎日集中して行うため、結果を得やすい。
- ・良い姿を具体的に褒めるため、褒められた子は意欲や自信につながる。他の子は自分も褒めてもらおうと良い姿を真似し、友達同士で刺激し合いながら取り組むことができる。

#### <おもしろい顔>

保育者が「まねっこまねっこあっぷっぷ」の掛け声でさまざまな口の形をすると、子ども達は保育者の口の動きを見て真似をする。保育者は口を意図的に大きく動かすことを配慮する。



【写真2 まねっこ遊びの様子】

活動時に着席できず、他事をする事が多いA児。まねっこ遊びに興味をもてるよう「こんなおもしろい顔できるかな？」と顔をくしゃくしゃにすると、「変な顔！」と笑ってこちらの様子を見た。「Aもおもしろい顔できる？」と聞くと、「できるよ！」とやってみせたため、「Aもおもしろい顔〜。」と顔を見合わせ笑った。翌日以降、いきいき遊びの時間は着席し、意欲的に取り組むようになった。

#### <こんなことができるよ！>

当初、保育者や友達の様子を見ていたB児。ある日、偶然していた口の動きを見逃さず「Bがおもしろいことしているから、真似しよう！」と舌を鼻につけるような動きをすると、嬉しそうにし

ていた。その後、参加できるようになり「こんなことができるよ！」と自分で考えた動きを何度も繰り返しやって保育者に見せていた。

#### <たこさんだよー>

口の動かし方が分からないC児には、近くへ行っって口の動きがよく見えるようにしたり「たこさんになるよ。(唇を突き出す)」と保育者がやって見せたりして動きを伝えたところ「たこさん、う〜って言っているよ！」と口をとがらせ真似することができた。「かわいいたこさんがいるね！」と言うと嬉しそうな顔をし、以後同じことをすると「たこさんだよー。」と言って喜んでやるようになった。

#### <考察>

いきいき遊びのひとつとして活用したことで、毎日取り組むことができた。咀嚼力が弱く魚や肉の噛みだめをする子もいたが口を大きく動かしてよく噛むようになり、噛みだめをする子が減った。保育者が聞き取りにくさを感じていた子も、発音が明瞭になってきている。

「おくちの体操」は子ども達の大好きな遊びでリクエストされることも多い。今後も継続的に行うことで、口の動きがスムーズになるよう取り組んでいきたい。

#### (2) タフロープを使った遊び

製作コーナーにあるタフロープを、子ども達は切ったり、丸めたりして様々に遊んでいる。

身近で扱いやすいタフロープを遊びに取り入れることで以下の機能の向上を期待する。

- ・指先を使ってタフロープを裂く  
→指先の運動機能
- ・タフロープを投げたりキャッチしたりする  
→全身運動機能（動体視力、空間認知）
- ・タフロープを吹く  
→口腔機能

#### <ふわふわくらげで遊ぼう>

裂いたタフロープを上から落として見せると、

「うわぁ～！ほしい！！」と興味を示した。一人一本タフロープを裂くと、「見て！応援のやつ！」と歌いながら左右に振りポンポンに見立てたり、投げたりする姿が見られた。その中で、フワフワ落ちる様子を「くらげみたい。」と言うつぶやきを広げると、「くらげ捕まえた！」「頭の上に乗っちゃった！」と遊びが広がった。

自由な動きや発想を褒めたり真似したりするところを大切に遊んだところ、以下のように遊びが広がった。

#### (ア) キャッチする

- ・保育者が子どもの頭上から落としたりしたものキャッチする。
- ・タフロープを自分で投げ上げ、自分でキャッチする。
- ・上に投げ、手をたたいてからキャッチする。
- ・上に投げ、下から息を吹きかけキャッチする。
- ・上に投げ、ジャンプしてからキャッチする。
- ・上に投げ、回転してからキャッチする。
- ・前に投げ、キャッチする。
- ・2人ペアになり、互いに投げキャッチする。



【写真3 投げて息を吹いている様子】

#### (イ) 吹く

- ・タフロープを床に置き、ハイハイの格好になる。タフロープに息を吹きかけながら前進する。
- ・タフロープを上に投げ、下から息を吹きかけ落とさないようにする。

「吹く」という動作をより楽しむために、ストローを用意した。這った時にストローが床に着かないよう、10センチ程度に切って、口をつけた部

分とそうでない部分分かるよう、片方のストローの先にビニールテープを貼った。



【写真4 吹くときに用いたストロー(下)】

<できたー！>

ストローの先をどこに向けるとふわふわ動くか分からず「難しいな。」と言う子もいたが、友達が楽しそうにする姿を知らせると「自分もやりたい！」と試行錯誤し、感覚がつかめると「できたー！」と嬉しそうにした。友達同士でふわふわくらげの移動距離を競い「〇〇の勝ち！」と競争して楽しむ姿も見られた。



【写真5 ふわふわくらげが面白く動くことを楽しむ子ども達】

### ふわふわくらげの作り方

- ・タフロープを50センチメートルほどに切り、真ん中を縛る。(保育者)
- ・指先を使ってタフロープを裂く。(子ども)



【写真6 裂く前のタフロープ】



【写真7 裂いたタフロープ】

### <考察>

指先を使わず、タフロープを思うように裂けない子もいたが、自分の物を自分で作って使うことで、愛着が湧いたようだった。運動遊びを好まない子や、初めてのことに苦手意識を示す子も、不規則な動きに興味をもち、楽しんで参加することができた。繰り返し遊ぶことで運動量も増えた。吹くという動作を遊びに加えたことで、意欲的に取り組むことができた。

### <親子でふわふわくらげ>

幼稚園で存分に遊んだ「ふわふわくらげ」を家に持ち帰ることにし、親子で楽しんでもらった。

この遊びで育てたい力や遊び方はクラス便りで保護者に知らせた。

以下は保護者から寄せられた家庭での遊びの様子と感想である。

### <保護者からの感想>

- ・ストローで吹いたり、上に投げたものを取ったり色々な技を「ねえ見て見て！」と次々と披露してくれました。「これはできるかな？」と大人が椅子の上に乗ってタフロープを落とすのを床に着く前に子どもがとる(子どもはキャッチするごとに椅子から離れていく)遊びをしました。「もっと遠くする！」と張り切り、遠くからでもキャッチ出来たので驚きました。
- ・「難しいな。」と言いながらも何度かやるうちにキャッチできるようになりました。吹くということがあまりなかったので、いい運動だと思います。「投げて！」とタフロープでキャッチボールをしたり、「こうすればいいかな？」と結び目をどう吹いたらよく飛ぶのかも親子で考えながら遊べました。「またやろうね！」と言っていました。
- ・「これどうやって遊ぶの？」と聞くと、床に這いつくばってストローを吹いてタフロープを一生懸命飛ばしていました。簡単に遊びながら口腔機能も鍛えられていい遊びですね。遊びの中で、「難しいね。」「もう一回やろう！」などと自然と会話も増えました。家でもやっていこうと思いました。

### <考察>

保護者にも遊びを紹介し、実践してもらうことで、子どもの遊びに興味をもってもらうきっかけになった。また、親子で工夫して遊ぶことで、家庭内で楽しみながら体を動かすことができた。

また、この遊びが口腔機能を育てることに繋がるということをクラス便りでお知らせしておいたので、保護者も遊びの意義を理解し家庭でも取り組んだのだろう。

## <研究内容2>

### 話したい意欲を育てる指導援助

#### (1) 共感し思いを引き出す援助

保育者の援助部分・・・下線

#### <おいものつるひきごっこ>

年長が育てていたさつまいもを収穫するというので、その様子を見学することにした。

畑から年長児が一生懸命につるを取っており、年少は「頑張れ！」と応援しながら様子を見ていた。年少も見ているだけでなく、つるを引く体験ができないかと考え、年長の邪魔にならないよう畑の外に伸びているつるを引っ張ることにした。保育者がつるを引っ張ると「僕もやりたい！」と目を輝かせ、次々に一緒に引っ張る子が出てきた。以前読んだ『おおきなかぶ』に出てきた言葉を思い出した子が、「うんとこしょ、どっこいしょ」と言ったので、保育者が「まだ抜けない！〇〇も手伝って！」とおおきなかぶのイメージが膨らむよう声をかけると、「はーい！」と見ていた子も参加しみんなでつるを引っ張った。

保「まだ抜けないね。」

子「おおきなおいもが出てくるかな？」

などワクワクしながら遊んだ。



【写真8 つるを引っ張っている様子】

ひとしきりつるを引っ張った後、

子「気持ちがいい！」と上に寝そべる子に

保「お芋のつるのベッドやね」

子「お芋だ！」と収穫した芋を見て驚く子に

保「おっかいね！」

子「でっかいミミズだ！」と土から出てきた虫に興味を示す子に

保「ほんとだね。でっかいね」

など、子ども達の気づきや思いを受け止めるようにした。

初めてのことに對して抵抗があるB児は保育者と一緒に友達の応援をしていたが「先生と一緒に引っ張ってみようよ」と誘うと、しばらくして「Bもやっていい？」と聞きに来た。「いいよ。いっしょにやろ」と言うと嬉しそうにつるのところへ行き、「よいしょ！」と掛け声をかけながら一生懸命に引っ張っていた。みんなが他の遊びに移ってからも、保育者と一緒につる引きごっこを楽しんだ。降園前に、芋ほりの体験を振り返ろうと『さつまいものおいも』の絵本を読むと、芋と子ども達のつなひきの場面で「あ！これ一緒だ！」「今日やったね。」と友達と嬉しそうに顔を見合わせていた。

#### <考察>

年長の芋ほりの様子を見て、興味が高まっている子ども達の思いをくみ取り、実際に触れたりする機会を設けた。そこから様々な遊びが生まれ“芋のつるを引っ張る”という活動が感動体験に繋がった。保育者が一緒に遊び、子どものつぶやきを拾うことで、より一層ワクワクする気持ちが高まった。保育者は子どもの発した言動にすぐに反応ができる眼をもつことが大切であると感じた。

また、取りかかりには個人差があるので、様子を見ながらタイミングよく言葉かけすることで、どの子も感動体験ができるようにしなければならないと思った。

<すてきな模様ができたね！>

描画やスタンプ遊び時に、色遊びをする姿が見られたため、他の方法で楽しめる方法はないかと考え、和紙染に取り組んだ。

保育者が、折りたたんだ和紙に「どの色にしようかな～」「この色はこっちにつけようかな」と楽しそうに染める姿を見せると、子ども達から「やりたい！！」という声が上がった。

和紙に絵具が染みこむ様子やそーっと折り目を開いていく様子を、子ども達も息をのんでじっと見つめていた。最後の折り目を開いて出来上がった模様を見せると、「きれーい！」「やりたい！」

とさらに興味が高まったようだった。

#### < 勤労感謝のプレゼント >

和紙染めが子ども達のブームになりつつあった頃、さらに活動に期待がもてるように、きれいに染めた和紙で勤労感謝のプレゼントを作ろうと提案した。子ども達は目的ができたことでさらに意欲的になり、

子「これはお母さんの好きな色！」

「どんな模様になるかな？」と会話も弾んだ。

保「お母さん、大喜びだね。」

「どんな風になるかな？」

などと言葉を掛けながら、完成への期待が高まるようにした。破れないよう慎重に紙を広げる様子を隣で一緒に見守り、全て広げると、「うわ～！きれい！！」「すごーい！！」と子どもと一緒に喜ぶようにした。できると、「〇〇君のはどれ？」「きれい！」と自分や友達が作ったものを見て楽しむ姿が見られた。

後日、「作った紙が箱になったよ！」とあらかじめ保育者がつくったものを見せると、「いいね！」「早くあげたいな。」とより一層プレゼントすることへの期待が高まった。

持ち帰る日に、渡すドキドキ感を高められるよう、子ども達を近くに集め小さい声で勤労感謝の日（翌日）に渡すことを約束した。すると、降園時には、「お母さんこれ（プレゼント入れた手提げ袋）絶対に見たらだめだよ！」と保護者に念を押したり、袋をぎゅっと握って中が見えないようにしたりする子がいた。

翌日、プレゼント渡しの様子を聞くと、「びっくりしてた！」「かわいいねって言ってた。」「ペンを入れた！」などその時の様子を一生懸命伝えようとする姿があった。また、保護者からも「朝起きると、いつもありがとうって渡されて驚きました。」「こうやって作ったんだよ。と紙を折って説明してくれました。」など思いを伝えようとする様子がたくさん聞かれた。



【写真9 プレゼントの小物入れ】

#### < 考察 >

子ども達の興味を把握し、活動に取り入れたことで、意欲的に参加し、子ども達の発見やつぶやきにつながった。

- ・和紙を染める
- ・染めたものが箱になる
- ・箱をプレゼントとして大好きな保護者に渡す

上記が子どものワクワク感をより高めた。その場その場で子どもの気持ちに寄り添うことが思いを引き出すことにつながると感じた。また、作ったものを保護者に渡すことで、家庭での会話も広がり、子どもの気持ちも一層満たされたようだった。

#### (2) 信頼関係の中で伝える喜びを感じるための援助

< 明日は味噌汁です！ >

普段積極的に保育者に話しかけることが少ないE児。ある日、砂場で一人でごちそうづくりを楽しんでいたため、保育者の方から会話のきっかけづくりをした。「何を作ってるの？」と聞くと「カレーだよ。」と答えた。隣で様子を見てみると、「人参入れまーす。」「塩入れなくちゃ！」などつぶやきながら砂を鍋に入れていたため、「他にいるものはありますか？」と聞くと、「玉ねぎください。」と答えた。保育者が砂を集め「玉ねぎ入れていいですか？」と聞くと「ちょっとまだです。」と鍋の中をかき混ぜ、「いいですよ！」と答えた。その後もE児と共有しながら遊びを楽しんだ。しばらくすると、皿を2枚持って来て「はい、これは先生の。」と盛り付けた。「いただきます。」をして一緒に食べると、「おいしいね。」と笑顔で言った。片付け時には満足そうな顔で「明日は味噌汁です！」と言った。

#### < 考察 >

子どもの興味に寄り添い、じっくりと関わることで心を開き、言葉のやり取りを楽しむことができたのだと思う。話が楽しいと思えるためには、まずは個の様子を把握することが大切だと感じた。

<あのね、〇〇したよ>

なかよし遊びで好きな遊びを見つけて楽しめる子ども達。何かを見つけたり作ったりすると保育者に「〇〇だよ。」と見せに来ることが多くなった。

子ども達の楽しかった思いをじっくり聞くためなかよし遊びのあと、遊んだことの交流をする時間を設けることにした。交流を始めた当初、あてられると答えられない子や、単語で答える子が多かったため、スキンシップを図って安心して話せるようにしたり、保育者が言葉を補ったりするようにした。

保「どんなことをして遊んだの？」

子「・・・砂場・・・」

保「砂場で遊んで楽しかったんだね。何を作ったの？」

子「山！」

保「山を作ったんだね。どれくらいの山？」

子「こーんぐらい」（身振り手振り）

保「大きい山ができたんだね。」

そのようなやりとりを繰り返すうちに、「〇〇が楽しかった！」など短い文章で言えるようになった。また、作ったものを見せる時には、「これは〇〇で作って…」などと目を輝かせながら一生懸命に説明した。「いいなあ。僕も作りたい！」と友達に認められると、嬉しそうにしていた。

また、翌日には「〇〇君、昨日の（続き）しよう！」と友達を誘って遊ぶ姿も増えた。

F児はずっと友達の話聞く方だったが、ある時、自分からはじめて挙手をした。タイミングを逃さず、指名するとゆっくりと前に出てきた。

子「・・・ブランコ・・・」

保「ブランコしたんだね。気持ちよさそうに乗ってたもんね。」

子「うん！」

話そうとした気持ちを受け止め「よく分かったよ。お話してくれてありがとう。」と言うと嬉しそうに笑った。その後、挙手することが増え、保育者はもちろん、クラスの友達に聞いてもらえることが嬉しくて一生懸命伝えようとする姿が増えた。

G児は、普段あまり自分から話をしないため、話す喜びを感じてほしいと思っていた。

ある日、なかよし遊び後に自分の作ったものを大事そうに持って、満足そうな表情をしていたので、話すきっかけになればと思い、「Gちゃんは何

したの？」と聞いてみた。すると、「あのね～これ作った」と恥ずかしそうにプレスレットを見せた。

保「素敵だね。どうやって作ったの？」

子「これ（じゅず玉）をこうやってひもに入れたの」「いっぱいいっぱい入れたの」

保「一つ一つひもに通していったら、こんなに素敵なのができたんだね。頑張って作ったね。」大きくうなずき、満足そうに戻っていった。

その後、徐々に挙手するようになり、「〇〇したよ。」「楽しかった。」と話し方は幼いが、嬉しそうに話すようになった。

### <考察>

みんなの前で話すことは緊張することだが、子ども達の楽しかった思いをゆっくりと受け止めることで、話そうとする意欲につながった。保育者だけでなく、友達にも聞いてもらえたことで、嬉しさも増し、翌日以降の遊びの広がりにもつながったように感じる。そこから、友達関係も広がり、少しずつだがやり取りも楽しめるようになった。

子ども達の楽しかった思いを伝える機会を意図的に設けることで、保育者だけでなく、友達にも伝わった喜びを感じることができた。

## 6. 成果と課題

### <成果>

#### <研究内容 1>

#### 口腔機能を育てる遊びの工夫

- ・いきいき遊びやいきいき運動遊びなど、日常生活の中に口腔機能を育てる活動を位置付けたことで、楽しく継続して取り組むことができた。
- ・訓練ではなく、遊びの一環として取り組めるように遊びを様々に発展させ、競争形式にしたり、道具を工夫したりしたことで子ども達の意欲が高まった。その結果、体幹が鍛えられ口腔機能の向上につながった。

## <研究内容 2>

### 話したい意欲を育てる指導援助

- ・スキンシップを図ったりじっくりと話を聞いたりし、個々の気持ちを受け止めながら保育をしたことで、信頼関係を築くことができた。また、保育者や友達に楽しかったことや遊んだことに共感してもらえることで、嬉しいと感じたり意欲や自信につながったりした。
- ・日々の保育の中で、保育者も子どもと一緒に思いやり遊び、子どもの言葉に共感することで、日常の活動が感動体験となり、話す意欲につながった。
- ・様々な活動に保育者と一緒に参加することで、安心して活動に取り組むことができ、友達と楽しさや嬉しさを共有したい気持ちが膨んだ。その結果、会話が増え、園生活がより楽しいものになった。

## <課題>

### <研究内容 1>

#### 口腔機能を育てるための遊びの工夫

- ・口腔機能を十分に育てるためには、長期的な見通しをもって、粘り強く意図的な遊びを継続することが必要である。そのため、クラスの実態を早期に把握し、年間を通して計画的に行う必要がある。
- ・訓練ではなく、遊びの一環として楽しく取り組めるよう、さらに遊びの工夫が必要である。
- ・体幹や口腔機能について、より深い専門的知識を学び、保育の中でどう生かしていくかを考えて取り組む必要がある。

## <研究内容 2>

### 話したい意欲を育てるための指導援助

- ・意欲を育てるためには、子どもとじっくり関わり信頼関係を築くことが基本である。一人一人の子どもとの関わりを一層深めることが必要である。
- ・子どもの心の動きは一人一人異なるため、タイミングを見計らい、働きかけていくことが大切

である。子どもの心の動きを的確にとらえられるよう、保育士である自分自身の資質を高めていくことが大切である。

- ・3歳児は語彙が急激に増え、心身両面の成長が著しい時期である。意欲をかきたてる環境や活動を工夫し、話さずにはいられないような園生活を保障していかなければならない。
- ・いきいきと話をするためには、安心して生活できる土台が大切である。土台を作るためには、家庭と連携を図りながら信頼関係を築き、園と家庭と一緒に子どもを見守っていくことが大切である。

## 7. まとめ

今回の研究を通して、自分の保育の見通しの甘さや、知識不足など、今後に向けて多くの課題に気付くことができた。一人一人のつぶやきや様々な表情の裏にある子どもの思いにしっかりと向き合えるよう、今一度保育を見直しながら子ども達と接していきたい。

## 参考文献

中川信子著 (2009) 『ことばをはぐくむ - 発達に遅れのある子どもたちのために』 ぶどう社